氷見市埋蔵文化財調査報告第31冊

脇方谷内出中世墓

２０００年５月

氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財調査報告第31冊

脇方谷内出中世墓

２０００年５月

氷見市教育委員会

序

氷見市街地からほぼ真北の方角に見える石動山は、付近に比肩する山がなく、四周山麓ならびに海上はるかより仰ぎ見ることができ、古代・中世・近世と、幾多の変遷をたどりながらも、北陸を代表する山岳信仰遺跡のひとつとして、あがめられてきました。

石動山の大部分は石川県鹿島町に含まれますが、氷見地域も大きな影響を受けており、それを今に伝えるものとして、市内各所に数多く残された中世石造物があります。

石動山麓に位置する脇方谷内出中世墓も、そうした石造物が残された場所として、古くから知られておりましたが、このたび急傾斜地崩壊防止工事に伴って、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、原位置を保った数多くの石造物が確認され、中世の氷見を知る上で大変貴重な遺跡であることが判明しました。

幸い、工事関係者や地元の方々のご理解を得ることができ、遺跡は現状保存されることになりました。

調査、そして保存に伴う設計変更などにあたりましては、富山県や脇方地区などの関係者の皆様に、多大なるご協力をいただきました。この場を借りまして、厚くお礼申し上げます。

この報告書が今後の文化財保護の一助となることを願うとともに、遺跡のより一層の保護・活用を図っていきたいと思います。

氷見市教育委員会

例　　言

1　本書は、脇方地区急傾斜地崩壊防止工事に伴う、氷見市脇方地内所在の脇方谷内出中世墓の発掘調査の報告書である。

2　調査は、富山県氷見土木工事事務所の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3　調査事務局は氷見市教育委員会生涯学習課に置き、文化係長坂本研資・主任串田真弓・主任小谷超が担当し、課長石崎久男が総括した。

4　発掘調査は、氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員大野究が担当した。

5　調査参加者は次のとおりである。

沢井正雄・沢井とき・田口久仁子・東海舞子・向春子（以上、氷見市シルバー人材センター）、三矢恵京・日南静・嵩尾朋昭（以上、遺物整理）

6　本書の編集・執筆は、大野が担当した。

7　調査を通して以下の方々からご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、氷見市立博物館、脇方地区、大境地区、京田良志、西井龍儀、宮田進一、浅野弘道、丁場和雄、谷野秀雄、東軒一虎、㈱エイ・テック、㈲植哲

8　調査の結果、本遺跡の遺構・石造物は、工事の設計を変更し、現状保存されることになった。なお、一部の遺物は、氷見市立博物館が保管している。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章　遺跡の環境と調査前の知見 …… 2

第３章　調査の成果 …… 4

第４章　ま　と　め ……22

参考文献 ……28

図 目 次

第１図　石造物搬入の様子…… 1
第２図　脇方谷内出中世墓と周辺の中世墓…… 3
第３図　遺跡平面図…… 5
第４図　遺跡立面図…… 7
第５図　Ａ区の石造物…… 9
第６図　Ｂ区の石造物……10
第７図　Ｃ区の石造物……12
第８図　石造物実測図（１）……16
第９図　石造物実測図（２）……17
第10図　石造物実測図（３）……18
第11図　石造物実測図（４）……19
第12図　石造物実測図（５）……20
第13図　石造物実測図（６）・遺物実測図……21
第14図　脇方谷内中世墓変遷推定図……23
第15図　石動山関係図……27

図版目次

図版１　（１）遺跡周辺空中写真
　　（２）遺跡全景
図版２　（１）調査前の様子
　　（２）調査後の様子
図版３　（１）調査後の様子
　　（２）調査後の様子
図版４　（１）中世土師器
　　（２）銅銭

第１章　調査に至る経緯と経過

氷見市脇方地区で計画されている急傾斜地崩壊防止工事には、脇方横穴群・脇方谷内出中世墓の２ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が含まれていた。

このうち脇方谷内出中世墓については、平成11年度の工事予定地に含まれていたため、年度内に記録保存を目的とする発掘調査を実施することになった。

そして平成11年８月23日付けで、富山県と氷見市の間で、脇方地区急傾斜地崩壊防止工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査委託契約を結んだ。

しかしながら現場は、民家が崖に接して建っており、樹木伐採や工事・調査中の安全確保の必要から、調査は工事がある程度進んだ状況で実施することになり、平成11年９月13日に着手した。

当初は、一部露出していた４基の石造物のみと考えていたが、発掘調査により、これらの石造物が原位置を保っていること、西側にさらに原位置を保った多くの石造物があることが確認された。

これらの状況から本遺跡が学術的に貴重なものであると判断し、氷見市教育委員会では、９月30日に県氷見土木工事事務所と協議を行い、現状保存に向けて設計変更を依頼した。そして10月21日に、地元脇方地区と協議を行い、設計変更と現状保存の了解を得た。

その後、工事中の機械出入口確保のため、写真測量により出土状況を記録した後、11月18日に一部の石造物を大境無料休憩所に移した。

さらに工事が遅延したため、平成12年３月29日付けで、委託契約を５月31日まで延ばし、３月31日に移動していた石造物を原位置に復した。その後、石造物の実測、報告書の作成を行った。

第１図　石造物搬入の様子

第２章　遺跡の環境と調査前の知見

氷見市は、富山県の北西部に位置し、能登半島の付け根東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡１町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230㎢、人口は約６万人である。

市域は、北・南・西の三方が標高300～500ｍの丘陵に取り囲まれ、東側は富山湾に面している。遺跡の所在する脇方地区は、市の北側を流れる宇波川の下流左岸に位置する。

宇波川は、石川県鹿島町の石動山（564ｍ）の南斜面に発し、県境を越えて白川地区で五十谷川と合流し、谷平野を経て宇波地区で海に入る長さ9.5㎞の二級河川である。

宇波側下流流域の遺跡としては、弥生時代以前の遺跡は今のところ確認されていない。　宇波神社境内にある宇波古墳は、明治33年８月に本殿再建のため地均しをしたところ、その直下から石槨が発見され、その中から人骨１体分、土器２点、鉄刀２振が出土した〔清水1960〕。人骨は直後に埋め戻されているが、残された須恵器から６世紀の古墳であることが判明している。

次に、灘浦トンネル西側出入口周辺の崖中腹に所在する脇方横穴群は、現在までに８基が確認されている。一部は古くから開口し、地元では「鬼の穴」「火の雨の降ったときの穴」と言い伝えられたという。昭和初年・30年・33年・平成元年に調査が行われている〔氷見市教委1989〕。

また、中世には能登石動山の影響を強く受けていた地域であり、脇方地区には寺院に由来するとされる地名が残っている。

遺跡は脇方地区中央の東西にのびる丘陵南側の裾近くの斜面に位置し、標高は約７ｍである。遺跡一帯は、丘陵裾に沿って住宅が建ち並んでおり、地元の人によれば、かつて建築にあたって丘陵斜面を削ったところ、石造物や人骨破片が出土したらしい。

この崖に古い石造物のあることについては、地元で古くから知られており、清水一布氏は「谷内の丘陵に７個の供養塔（板碑）を存する。外に田や畑の中より蓮台石、五輪石などの破片が時々出現する」と紹介している〔清水1960〕。

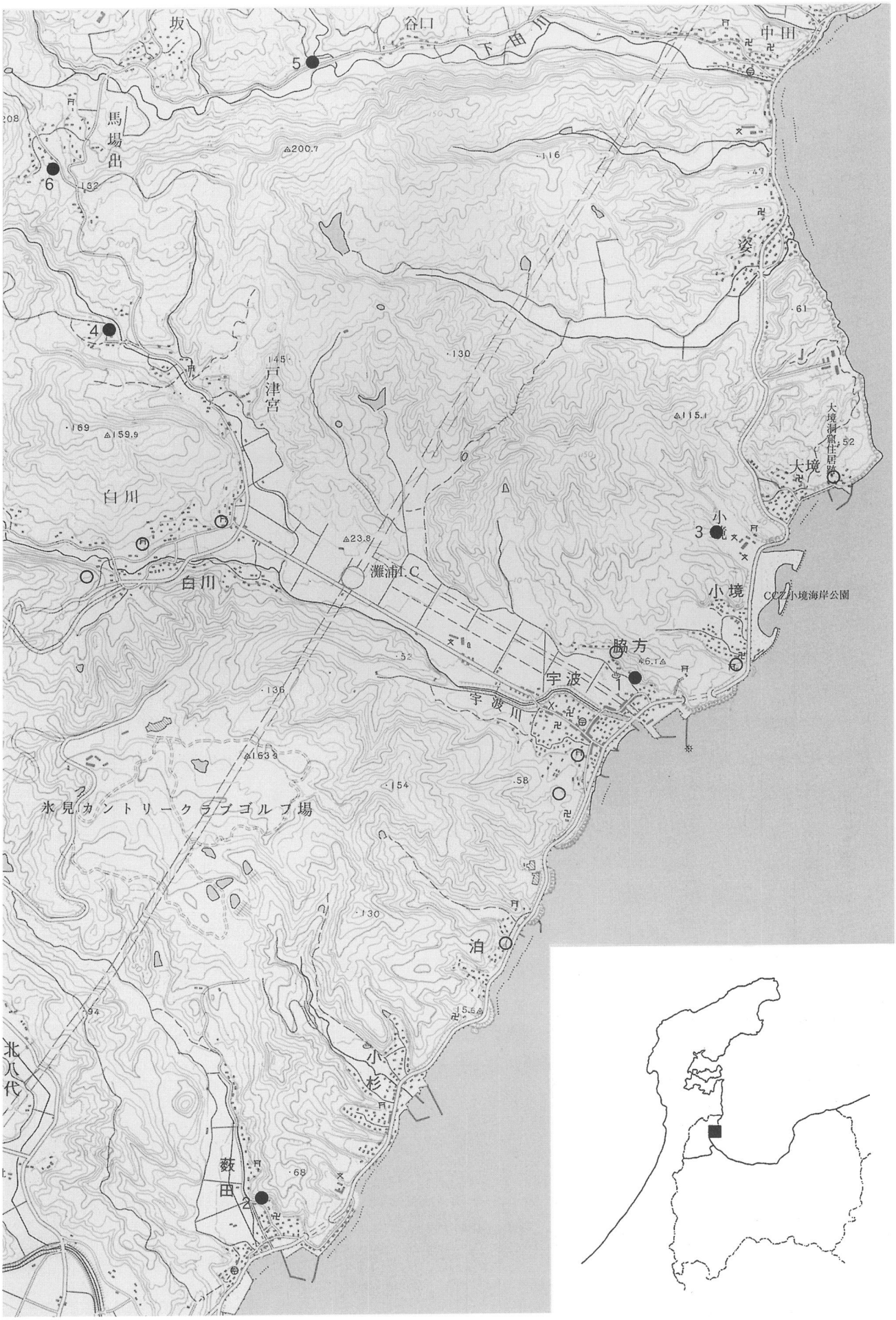
その後、石動山関係の文化財調査でもＡ１～４板石塔婆が取り上げられており、京田良志氏と岡本恭一氏は「向って最右端の板石塔婆にある梵字は、氷見市で最も雄渾なものである」「これら４基は鎌倉時代にさかのぼる製作と推定されるが、原位置のままとすれば極めて貴重な遺跡である」とし〔京田・岡本1984〕、櫻井甚一氏は「正面で見るかぎり、雄渾荘重な種子の筆法から鎌倉後期の造立と認められる」としている〔櫻井1989〕。

第２図　凡例

１　脇方谷内出中世墓　　２　藪田薬師中世墓　　３　髪塚　　４　戸津宮中世墓

５　長坂行入塚　　６　千人塚

○印は、主な中世石造物集積地。



第２図　脇方谷内出中世墓と周辺の中世墓（縮尺 1/25,000）

第３章　調査の成果

第１章に記したとおり、本遺跡は当初記録保存を目的として着手したが、調査の途中で現状保存することになった。石造物の一部は、工事中の機械出入口を確保するために一時搬出したが、工事の途中で急きょ元に戻すことになり、その結果石造物の実測・採拓は工事終了後現地で行うことになった。重量のある石造物を自由に動かすことは困難であったため、Ｂ区・Ｃ区後列の石造物の一部は、実測作業ができなかった。また、実測したものを含めて、底面や背面等の観察が十分に行えていない。さらに、各区の基礎石下の発掘は行わなかった。

第１節　遺構（第３・４図）

遺構は、西南西向きのシルト質崖の裾近くに位置し、ここに幅約９ｍにわたって三つの基壇が造成されている。現地表面から基壇までの高さは約１ｍである。以下、三つの基壇を向かって右側からＡ区・Ｂ区・Ｃ区とする。３基壇の間はそれぞれ約20cmである。

Ａ　区

向かって右側の基壇である。

間口約260cm、残存奥行長約80cm、背面の壁の高さ約140cmであり、基壇標高は約6.8ｍである。崖斜面を断面Ｌ字状に削り、平面は櫛型を呈する。なお、基壇前面は後世削平された可能性がある。現在基壇下にある刳り込みは、遺跡前面の家がかつて金魚の飼育のために掘ったものだとのことである。

Ｂ　区

中央の基壇である。

間口約340cm、残存最大奥行長約110cm、背面の壁の残存高約140cmであり、基壇標高は約6.5ｍである。崖斜面を断面Ｌ字状に削り、平面は櫛型を呈する。なお、基壇上部と前面は、今回の工事で削平されている。また、左端には南南西を向いた高さ60cm、幅60cm、奥行き45cmの釣鐘状の龕が穿たれている。

Ｃ　区

向かって左側の基壇である。

間口約270cm、残存最大奥行長約140cm、背面の壁の高さ約240cmであり、基壇標高は約6.6ｍである。崖斜面を断面Ｌ字状に削り、平面は櫛型を呈する。なお、基壇前面は今回の工事で削平されている。

その他

Ａ区上部に幅約50cmの水平な刳り込みがある。また、石造物にも明らかに上部から流れ落ちたと考えられるものがあり、上部にも何らかの遺構があったと推定される。

第２節　石造物

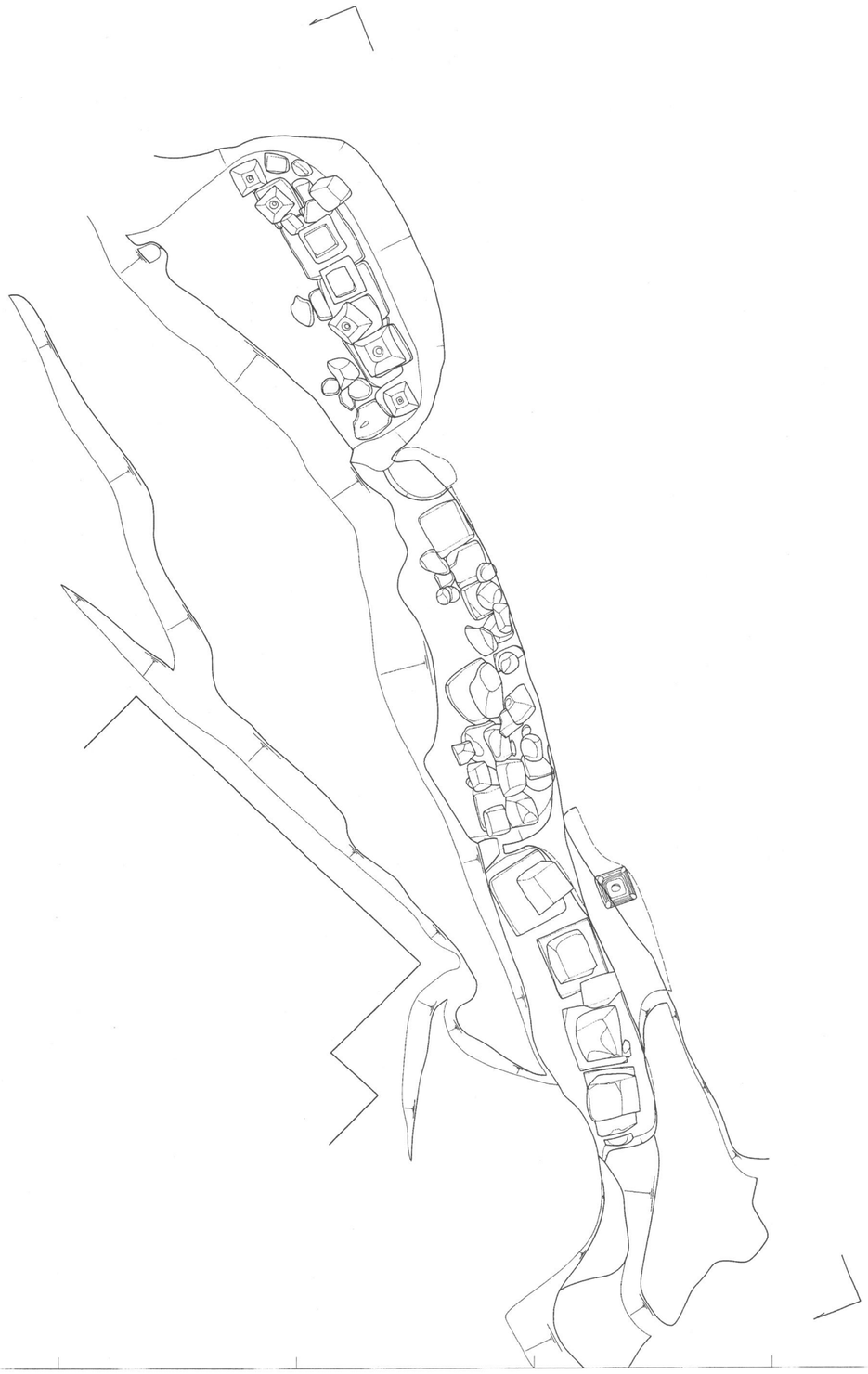
Ａ　区

Ａ区では５基の板石塔婆を確認した。Ａ１～４の４基の板石塔婆は、基礎石を含めて１列に並べられ、Ａ５板石塔婆は、Ａ２・３の基礎石直上に置かれている。

Ａ１板石塔婆（第８図１）

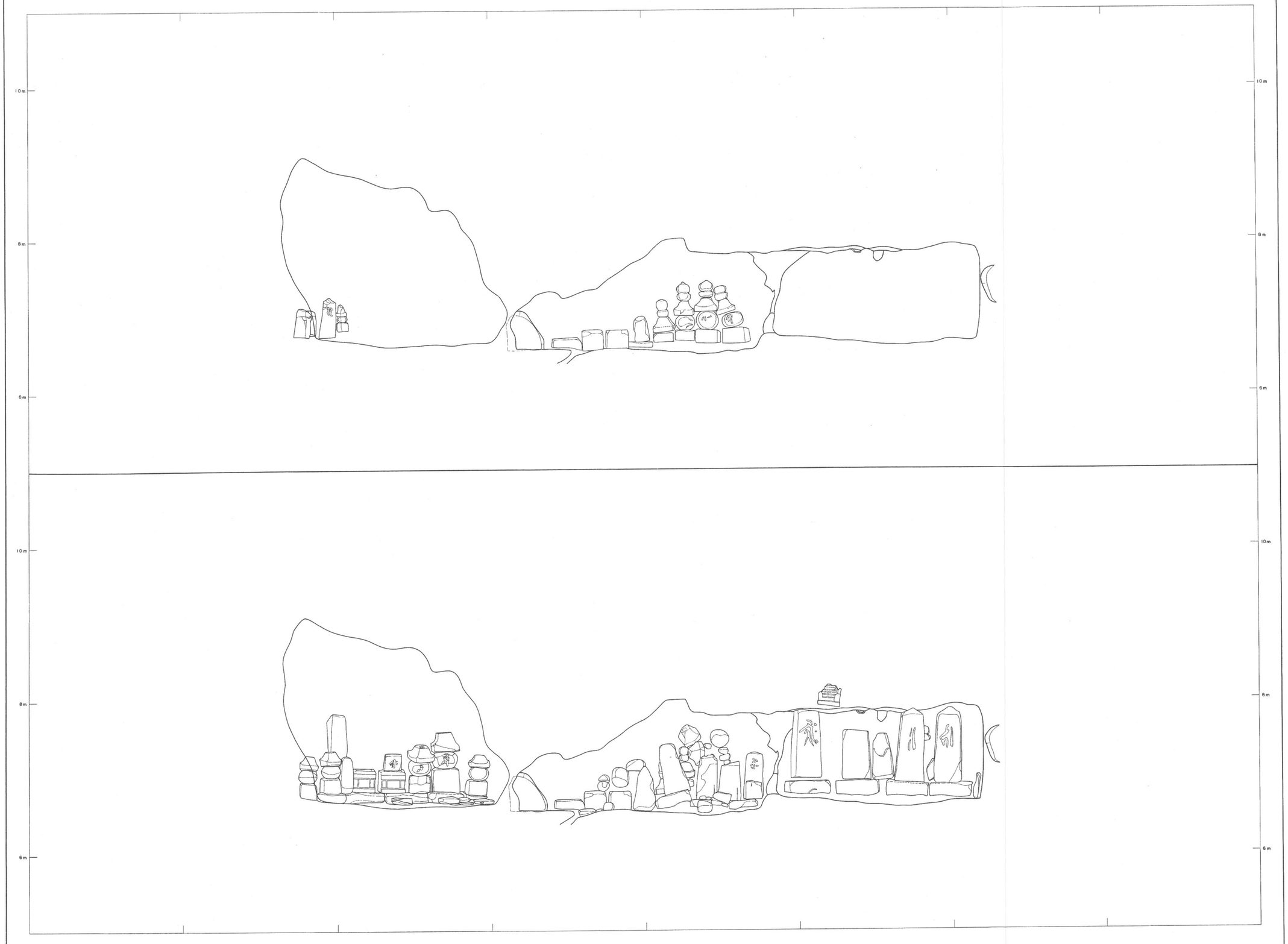
高さ94.7cm、最大幅35.7cm、最大奥行33.4cmの方柱状の板石塔婆である。幅56cm、奥行46cm、厚さ16cm

第３図　脇方谷内出中世墓　平面図



1:50

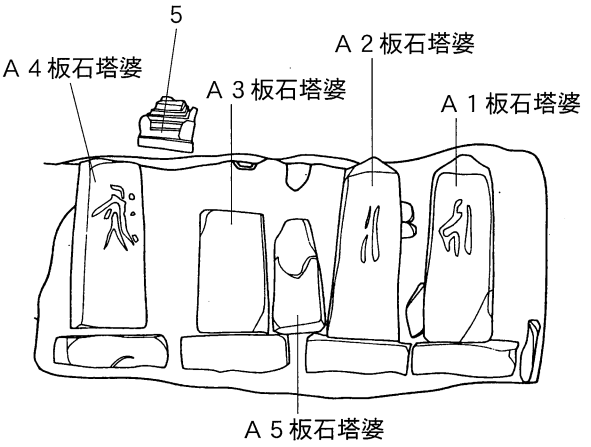
第４図　脇方谷内出中世墓　立面図



の基礎石にのせられている。石材は共に微粒砂岩である。正面に薬研彫の梵字「キリーク」、向かって右側面には梵字「サ」、同左側面には梵字「サク」を、方形の線刻輪郭付きで刻む。

Ａ２板石塔婆（第８図２）

高さ92.5cm、最大幅36.9cm、最大奥行32.5cmの方柱状の板石塔婆である。幅54cm、奥行44cm、厚さ16cmの基礎石にのせられている。石材は共に微粒砂岩である。正面に薬研彫の梵字「キリーク」、向かって右側面には梵字「サ」、同左側面には梵字「サク」を、方形の線刻輪郭付きで刻む。



第５図　Ａ区の石造物（Ｓ＝１/40）

Ａ３板石塔婆（第９図３）

上半部を欠損する。残存高64.5cm、最大幅33.8cm、最大奥行27.2cmの方柱状の板石塔婆である。幅55cm、奥行48cm、厚さ18cmの基礎石にのせられている。石材は共に微粒砂岩である。梵字も完存しないが、正面に薬研彫の梵字「キリーク」、向かって右側面には梵字「サ」、同左側面には梵字「サク」を、方形の線刻輪郭付きで刻んだものと思われる。

Ａ４板石塔婆（第９図４）

高さ93.5cm、最大幅35.0cm、最大奥行30.2cmの方柱状の板石塔婆である。幅55cm、奥行52cm、厚さ16cmの基礎石にのせられている。石材は共に微粒砂岩である。正面に薬研彫の梵字「キリーク」、向かって右側面には梵字「サ」、同左側面には梵字「サク」を、方形の線刻輪郭付きで刻む。

Ａ５板石塔婆（第10図41）

上半部を欠損する。残存高59.0cm、最大幅26.1cm、最大奥行19.2cmである。正面に五輪図形を陰刻する。石材は微粒砂岩である。

小　結

Ａ区の基壇は、基礎石を含むＡ１からＡ４までの板石塔婆の大きさに合わせて造られた可能性が高い。さらにこれらは同様の基礎石を持つこと、板石塔婆の形態が似ること、各基礎石と基壇の間に土砂の堆積がほとんどないことから、４基の板石塔婆は、あまり時間を隔てずに造立されたとみられ、ほぼ原位置を保ったものと考えられる。さらに細かく観察すると、Ａ１とＡ２の板石塔婆は、石材にみられる層状の団塊が一致することから、同一石材を裁断して造られたと考えられ、同時製作の可能性が高い。そしてＡ３板石塔婆もほぼ同時かやや遅れて造立されたと推測する。Ａ４板石塔婆は、基礎石の向きがやや右に傾いていることや、形態が他の三者とやや異なるため、後出のものと推測する。なお、Ａ４板石塔婆造立のときに、右３基をややずらした可能性もある。

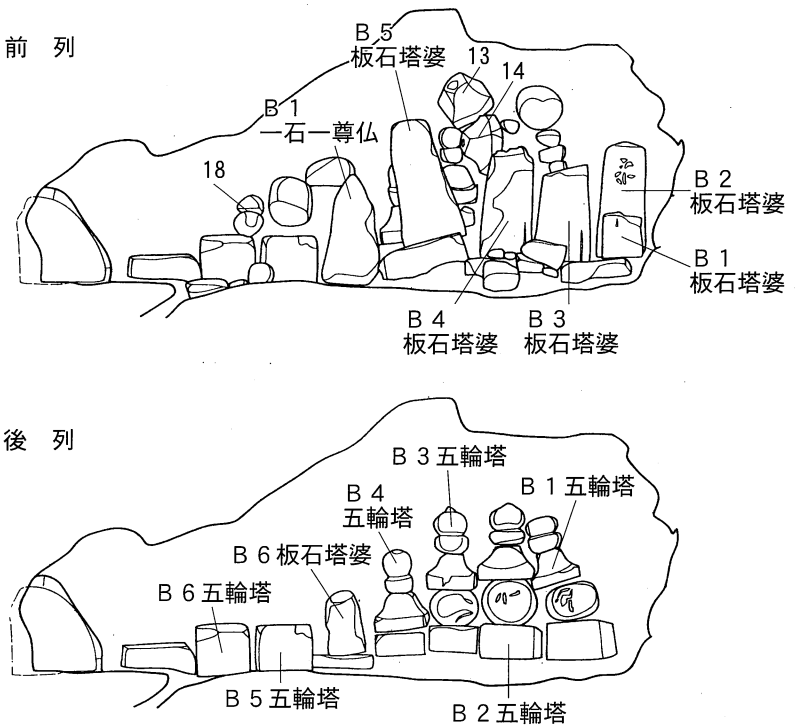
この基壇の造営は、板石塔婆の様式からして鎌倉時代後半（13世紀末～14世紀初め）とみられ、ややおくれる左端のものを含めたとしても、板石塔婆造立の年次に大きなひらきはないと思われる。

Ａ５板石塔婆は、形態からみてＢ区前列と同じ時期に、収められたものと思われる。なお、Ａ２・３

板石塔婆の基礎石との間に土砂の堆積がほとんどないことから、少なくともＡ５板石塔婆を収める時まで、Ａ区基壇の信仰が続いていたと思われる。

Ｂ　区

Ｂ区における石造物は、前後２列に配置されている。前列にはＢ２～５板石塔婆とＢ１一石一尊仏が並び、Ｂ２板石塔婆の前にＢ１板石塔婆がおかれる。後列にはＢ１～６五輪塔が並び、Ｂ４・５五輪塔の間にＢ６板石塔婆がおかれる。また、Ｂ６五輪塔の向かって左側には基礎石１基だけが残されている。



第６図　Ｂ区の石造物（Ｓ＝１/40）

Ｂ１板石塔婆（第10図６）

上半部を欠損する。残存高22.8cm、最大幅20.3cm、最大奥行16.3cmである。種子等は不明である。石材は微粒砂岩である。

Ｂ２板石塔婆（第10図７）

高さ39.3cm、最大幅17.7cm、最大奥行11.3cmである。方形陰刻輪郭内に梵字「バン」を薬研彫する。石材は微粒砂岩である。

Ｂ３板石塔婆（第10図８）

上半部を欠損する。残存高50.4cm、最大幅28.2cm、最大奥行18.0cmである。正面に五輪図形を陰刻する。石材は微粒砂岩である。

Ｂ４板石塔婆（第10図９）

高さ61.0cm、最大幅23.0cm、最大奥行17.2cmである。正面の剥離が著しく、種子等は不明である。石材は微粒砂岩である。

Ｂ５板石塔婆（第10図10）

高さ64.4cm、最大幅30.2cm、最大奥行19.3cmである。幅46cm、奥行42cm、厚さ18cmの基礎石にのる。石材は共に硬質の中粒砂岩である。正面の剥離が著しく、種子等は不明である。

Ｂ１一石一尊仏（第11図11）

高さ58.5cm、最大幅28.8cm、厚さ12.0cmである。正面上半に如来形の像の上半身を中肉に刻出し、両手と下半身は省略する。石材は粗粒砂岩である。

Ｂ１五輪塔（未実測）

火輪より上が向かって左にずれていたが、完形塔である。空風輪は高さ18cm、幅17cmである。頂部を欠損し、欠首はない。火輪は高さ18cm、幅26cmである。軒下端はやや反りあがり、上端も反る。水輪は高さ19cm、幅28cmである。最大幅が上半部におさまり、月輪内に梵字「バン」を刻む。地輪は高さ20cm以上、幅30cmである。石材はいずれも微粒砂岩である。

Ｂ２五輪塔（未実測）

完形塔である。空風輪は高さ23cm、幅18cmである。欠首が立ち、空輪の頂部が尖る。火輪は高さ17cm、幅29cmである。軒下端がやや反りあがり、上端も反る。水輪は高さ24cm、幅29cmである。最大幅が中央にあり、月輪内に梵字「バン」を刻む。地輪は高さ18cm以上、幅30cmである。石材はいずれも微粒砂岩である。

Ｂ３五輪塔（未実測）

完形塔である。空風輪は高さ25cm、幅17cmである。欠首が立ち、空輪の頂部が鋭く尖る。火輪は高さ19cm、幅25cmである。軒下端がやや反りあがり、上端も鋭く反る。水輪は高さ19cm、幅25cmである。最大幅が中央にあり、月輪内に梵字「バン」を刻む。地輪は高さ14cm以上、幅24cmである。石材はいずれも微粒砂岩である。

Ｂ４五輪塔（未実測）

水輪を欠損する。空風輪は高さ23cm、幅14cmである。欠首が立ち、空輪頂部はあまり尖らない。火輪は高さ20cm、幅27cmである。軒下端はやや反りあがり、上端も反る。地輪は高さ12cm以上、幅26cmである。石材は微粒砂岩である。

Ｂ６板石塔婆（未実測）

種子等は不明である。高さ34cm、最大幅20cm、最大奥行20cmである。石材は中粒砂岩である。

Ｂ５五輪塔（第11図17）

地輪のみ遺存する。高さ22.8cm、幅27.6cmである。石材は微粒砂岩である。

Ｂ６五輪塔（第11図39）

地輪のみ遺存する。高さ19.7cm、幅28.7cmである。石材は微粒砂岩である。

小　結

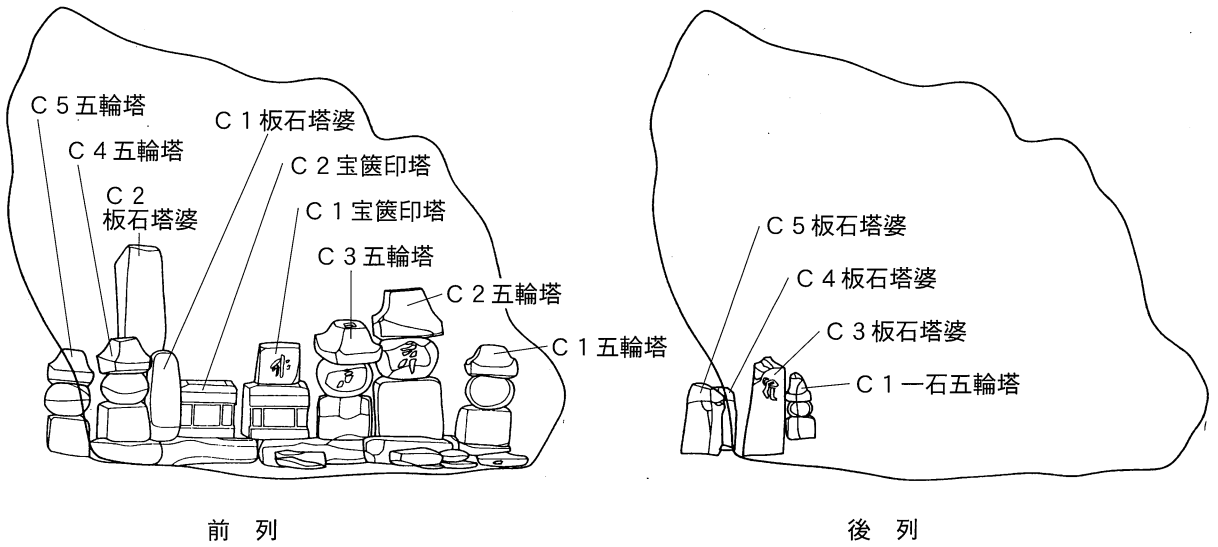
後列の石造物が整然と並ぶのに対して、前列の石造物は、ある程度土砂の堆積をみてから造立され、やや雑然としている。こうした状況から、Ｂ区では後列が先に造立され、その後に前列が造立されたと思われる。後列の中の順番は不明であるが、地輪だけが残るＢ５・Ｂ６五輪塔は、Ｂ６板石塔婆とあわせて時期が下る可能性がある。前列は造立の位置や土砂の堆積の様子から、Ｂ５・Ｂ１板石塔婆及びＢ１一石一尊仏より、Ｂ２～４板石塔婆が先行するものと思われる。形態から見て、後列のＢ１～４の五輪塔は南北朝時代（14世紀中頃～後半）のものであろう。これに対して前列の石造物は、形態や出土土

師器の時期から、室町時代前半（15世紀前半）のものと推定される。

なお、左端に所在する釣鐘状の龕は、その位置や向きのずれから、Ｂ区の最後に穿たれたものと考える。

Ｃ　区

Ｃ区における石造物は、前後２列に配置されている。前列は向かって右からＣ１～３五輪塔、Ｃ１・２宝篋印塔、Ｃ１板石塔婆、Ｃ４・５五輪塔であり、後列は同じく右からＣ１一石五輪塔、Ｃ３～５板石塔婆、それに浮いた状態で出土したＣ２板石塔婆である。



第７図　Ｃ区の石造物（Ｓ＝１/40）

Ｃ１五輪塔（第11図19、20、第12図21）

空風輪を欠損する。火輪は高さ14.9cm、幅23.0cmである。軒下端はほぼ水平であり、上端はやや強く反る。水輪は高さ16.5cm、幅23.2cmである。最大幅が上半部におさまる。正面部が欠損のため種子は不明。地輪は高さ18.8cm、上幅22.6cm、下幅23.6cmである。石材は全て微粒砂岩である。

Ｃ２五輪塔（第11図22、23、第12図24）

空風輪を欠損する。火輪は高さ22.8cm、幅32.8cmである。軒下端はほぼ水平であり、上端はやや強く反る。水輪は高さ22.0cm、幅29.5cmである。最大幅が上半部におさまる。月輪の内に梵字「バン」を薬研彫で刻む。地輪は高さ28.6cm、上幅32.8cm、下幅34.2cmである。石材は全て微粒砂岩である。

Ｃ３五輪塔（第11図25、26、第12図27）

空風輪を欠損する。火輪は高さ16.6cm、幅27.6cmである。軒下端はほぼ水平であり、上端はやや強く反る。水輪は高さ19.5cm、幅26.7cmである。最大幅はほぼ中央である。月輪の内に梵字「バン」を刻む。地輪は高さ20.0cm、上幅27.7cm、下幅27.7cmである。石材は全て微粒砂岩である。

Ｃ１宝篋印塔（第12図28、29）

相輪・笠を欠損する。塔身は高さ18.5cm、幅19.9cm、奥行19.9cmである。正面に梵字「キリーク」、向かって右側面に梵字「サ」、同左側面に「サク」を、それぞれ方形の線刻輪郭の内に薬研彫する。基礎は高さ28.6cm、幅30.6cmの壇上積式のものである。格狭間は無刻で、反花は複弁２葉を配し、隅に単弁をそえる。石材は共に微粒砂岩である。

Ｃ２宝篋印塔（第12図30）

相輪・笠・塔身を欠損する。基礎は、高さ27.9cm、幅30.0cmの壇上積式のものである。格狭間は無刻で、反花は複弁２葉を配し、隅には単弁をそえる。石材は微粒砂岩である。

Ｃ１板石塔婆（第12図31）

高さ59.6cm、最大幅24.4cm、最大奥行18.0cmである。正面の方形の線刻輪郭の内に梵字「バン」を刻む。石材は微粒砂岩である。

Ｃ４五輪塔（第11図32、33、第12図34）

空風輪を欠損する。火輪は高さ16.5cm、幅22.3cmである。軒下端は反りあがり、上端も反る。水輪は高さ16.9cm、幅20.2cmである。最大幅はほぼ中央にくる。月輪の内に梵字「バン」を刻む。地輪は高さ17.0cm、上幅22.2cm、下幅23.2cmである。石材は全て微粒砂岩である。

Ｃ５五輪塔（第11図35、36、第12図37）

空風輪を欠損する。火輪は高さ12.0cm、幅24.1cmである。軒下端はほぼ水平であり、上端は反る。水輪は高さ18.2cm、幅24.9cmである。最大幅は上半部におさまる。月輪の内に梵字「バン」を刻む。地輪は高さ18.2cm、上幅21.7cm、下幅21.4cmである。石材は全て微粒砂岩である。

Ｃ１一石五輪塔（第12図40）

高さ34.2cm、最大（地輪部）幅14.3cmである。水輪部の月輪内に梵字「バン」を刻む。石材は微粒砂岩である。

Ｃ３板石塔婆（未実測）

高さ52cm、最大幅22cm、最大奥行15cmである。正面に薬研彫の梵字「バン」を刻む。石材は微粒砂岩である。

Ｃ４板石塔婆（未実測）

高さ32cm、最大幅19cm、最大奥行13cmである。上半部を欠損する。種子は不明。石材は微粒砂岩である。

Ｃ５板石塔婆（未実測）

高さ37cm、最大幅20cm、最大奥行16cmである。上半部を欠損する。種子は不明。石材は微粒砂岩である。

Ｃ２板石塔婆（第12図38）

高さ64.0cm、最大幅23.3cm、最大奥行16.3cmである。五輪図形を陰刻し、その水輪部に梵字「バン」を刻む。石材は微粒砂岩である。

小　結

Ｃ区後列の石造物は、いずれも基壇上にわずかに土砂が流れ込んだのちに収められたものであり、前列の石造物が後列に先行するものと考えられる。

前列の石造物の特徴は、基礎石と石塔本体がずれていることである。基礎部分は造立当時の様子を残

したものと考えられ、出土の様子と形態からみて、Ｃ１・Ｃ２宝篋印塔とＣ１・Ｃ２・Ｃ４五輪塔の５基が、当初基礎石にのっていたと考えられる。その後、Ｃ３五輪塔を収めるときに、Ｃ１宝篋印塔を向かって左側にずらし、設置している。また、左端のＣ５五輪塔は基礎石を持たず、正面の方向も90°南にずれているため、前列の五輪塔では最後に収められたものであろう。Ｃ１板石塔婆は、基礎石から浮いて出土したため、前列の最後に収められたものと考えられる。後列の順番は不明であるが、Ｃ２板石塔婆は、後列の石造物が埋まってからのものであり、原位置を保っていない可能性が高い。宝篋印塔は様式から南北朝時代（14世紀中頃～後半）のものとみられ、五輪塔は室町時代初め（14世紀末～15世紀初め）の製作とみられる。とすれば、Ｃ区はまず中央に宝篋印塔が造立され、両側に五輪塔が順次追加されていったのであろう。後列の石造物は、室町時代前半（15世紀前半）のものであろう。

その他

Ａ区上部の刳り込みに、宝篋印塔の笠が１点置かれていた（第10図５）。高さ24.5cm、幅28.6cmである。下段は２段、上段は５段であり、隅飾突起は軒端のやや内側から立ち上がり、軒端を若干越えて外傾し、線刻の輪郭を施す。石材は微粒砂岩である。形態や大きさからみて、Ｃ１又はＣ２宝篋印塔と組になる可能性がある。

Ａ区・Ｂ区覆土中では、上方から落下したとみられる石造物が出土した。内訳はＡ２板石塔婆背後に五輪塔空風輪が１点、Ｂ２・Ｂ３五輪塔の上部に五輪塔火輪２点、Ｂ６五輪塔の上部に五輪塔空風輪１点、同じくその前面に五輪塔空風輪１点である。ただし、下記の３点を除く資料は、工事中に動かされたため、次の浅野氏宅庭の資料の中で記述する。

五輪塔空風輪（第11図18）

高さ22.9cm、幅15,3cmである。欠首が甘く、空輪の頂部があまり尖らない。石材は微粒砂岩である。

五輪塔火輪（第11図13）

高さ18.6cm、幅23.0cmである。軒先上端部を欠く。下端はほぼ水平であり、上端はゆるく反る。石材は微粒砂岩である。

五輪塔火輪（第11図14）

高さ17.7cm、幅24.1cmである。左右不均等でややいびつである。軒下端は水平であり、上端はゆるく反る。石材は微粒砂岩である。

浅野氏宅庭の資料

遺跡前面の民家の庭に、古くから石造物が置かれていた。これらは遺跡から過去に出土したものを寄せたものという。

五輪塔空風輪（第13図ア）

高さ25.2cm、幅16.9cmである。欠首はなく、空輪頂部は尖ると思われる。石材は微粒砂岩である。Ａ２板石塔婆背後にあったものである。

五輪塔空風輪（第13図イ）

高さ25.2cm、幅16.5cmである。欠首はなく、空輪頂部は尖る。石材は微粒砂岩である。

五輪塔空風輪（第13図ウ）

高さ22.9cm、幅13.7cmである。欠首はなく、空輪頂部は尖らない。石材は微粒砂岩である。

五輪塔空風輪（第13図エ）

高さ22.3cm、幅15.0cmである。欠首はなく、空輪頂部は尖らない。石材は微粒砂岩である。

五輪塔空風輪（第13図オ）

高さ21.9cm、幅16.5cmである。欠席はない。石材は微粒砂岩である。

五輪塔空風輪（第13図カ）

高さ19.2cm、幅12.3cmである。空輪・風輪とも形が甘い。石材は粗粒砂岩である。Ｂ６五輪塔前面にあったものである。

五輪塔火輪（第13図キ）

高さ18.5cm、幅26.2cmである。軒下端がやや反りあがり、上端も反る。石材は微粒砂岩である。

板石塔婆（第13図ク）

上半部を欠損する。残存高32.2cm、最大幅20.1cm、最大奥行14.1cmである。正面に梵字「バン」を刻む。石材は微粒砂岩である。

板石塔婆（第13図ケ）

高さ47.9cm、最大幅18.7cm、最大奥行15.7cmである。正面は剥離著しいが、梵字「バン」を刻んだと思われる。石材は微粒砂岩である。

板石塔婆（第13図コ）

高さ51.3cm、最大幅24.0cm、最大奥行12.7cmである。五輪図形を線刻し、水輪部分に梵字「バン」を刻む。石材は微粒砂岩である。

板石塔婆（第13図サ）

高さ31.0cm、最大幅20.8cm、最大奥行12.8cmである。正面に梵字「バン」を刻む。石材は微粒砂岩である。

一石五輪塔（第13図シ）

高さ37.2cm、幅14.3cmである。水輪に梵字「バン」を刻む。石材は微粒砂岩である。

第３節　遺　物

土師器小皿（第13図42）

Ｂ５板石塔婆前面の覆土から底部を上にして出土した。口径8.0cm、器高1.6cmの非ロクロ土師器完形品である。胎土に砂粒は含まず、焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。底部と体部の境が明瞭なタイプであり、宮田進一氏の編年によれば〔宮田1997ａ〕、小矢部市日の宮遺跡Ｃ地区に類例があり、時期は15世紀前半であろう。

銅銭（第13図43）

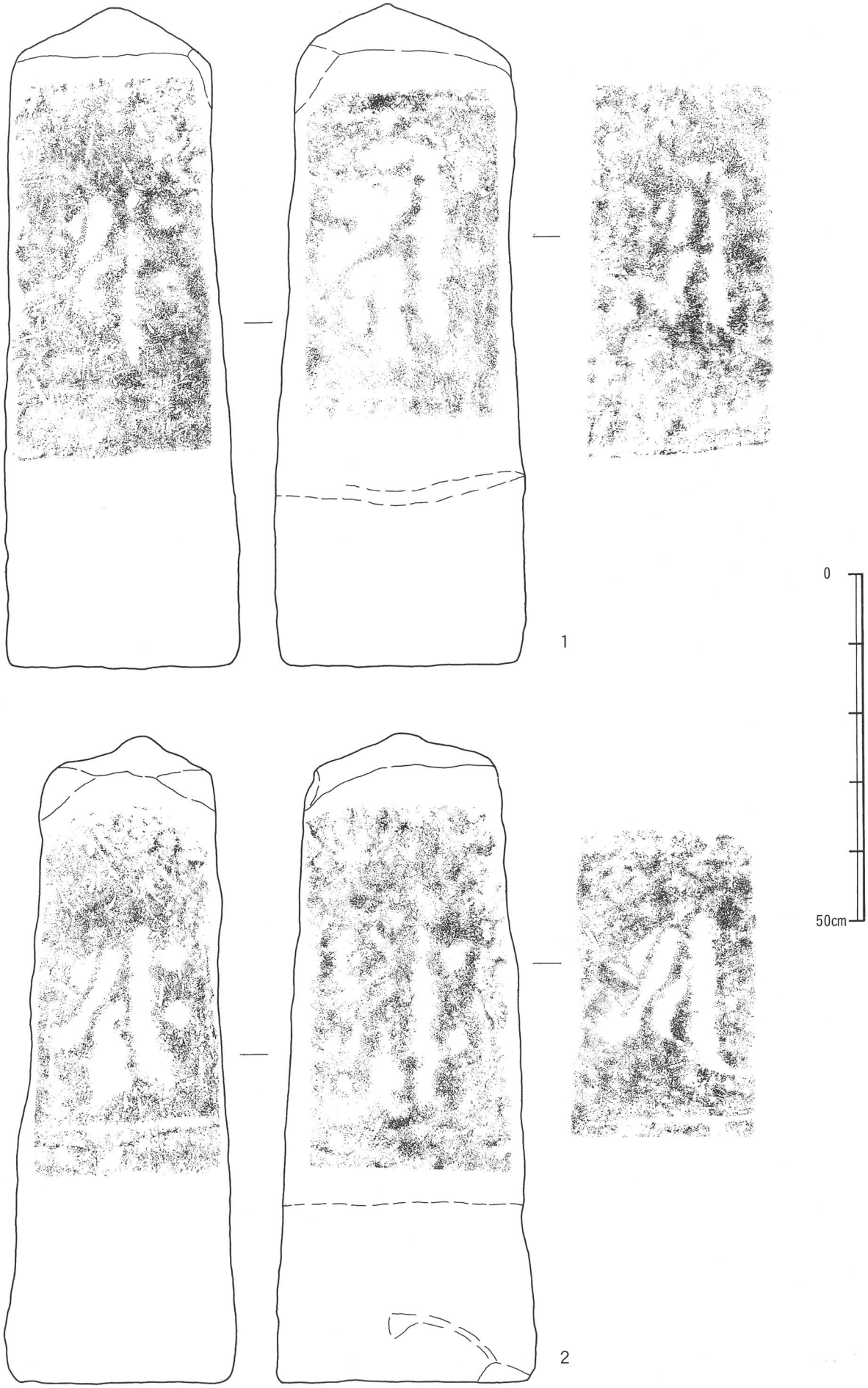
Ｂ４・Ｂ５板石塔婆の間の火葬骨集中地点からの出土。「開元通寶」である。直径2.3cm、重量は2.8gである。

銅銭（第13図44）

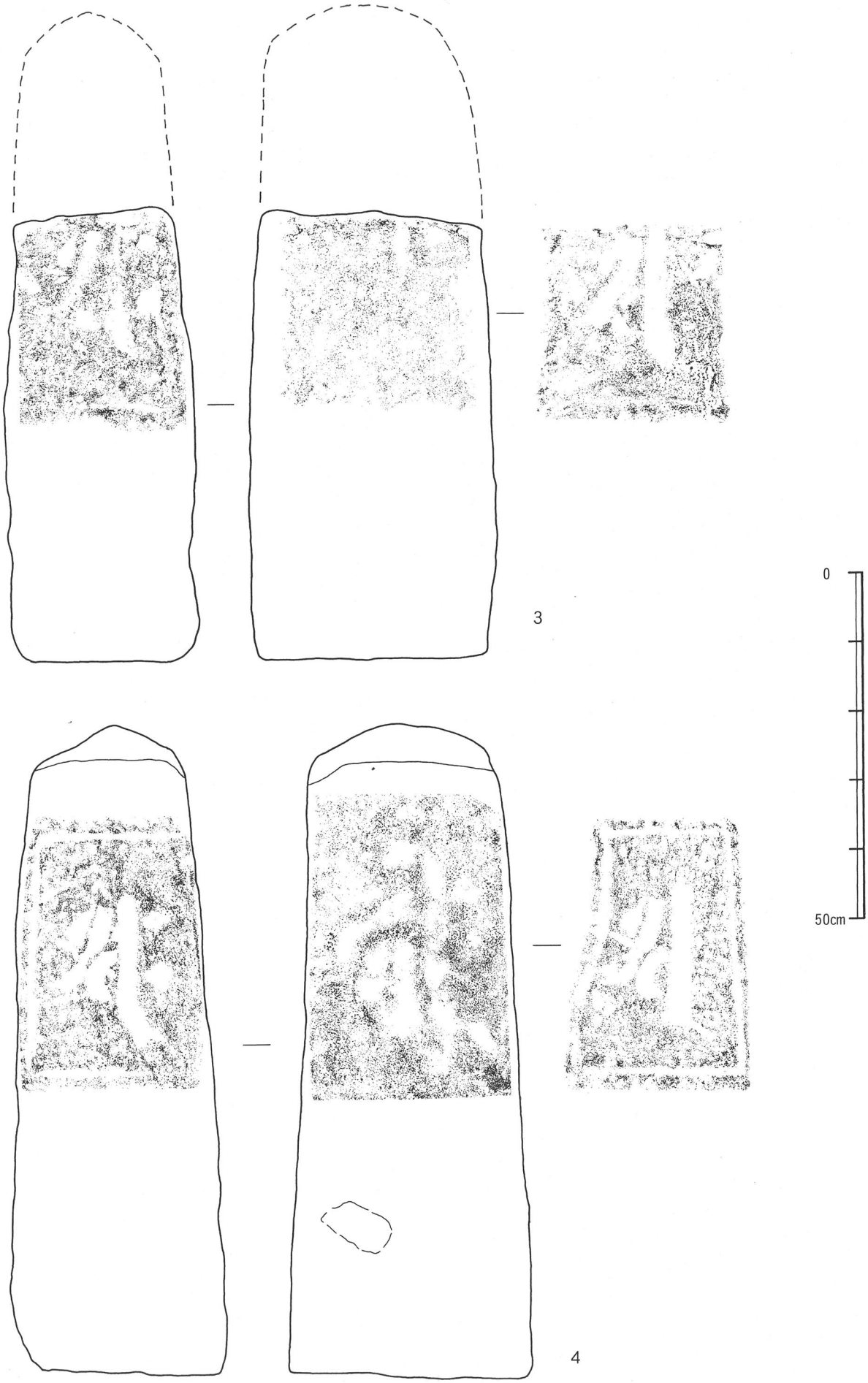
Ｂ４・Ｂ５板石塔婆の間の火葬骨集中地点からの出土。「元符通寶」である。直径2.3cm、重量は3.2gである。

第４節　火葬骨

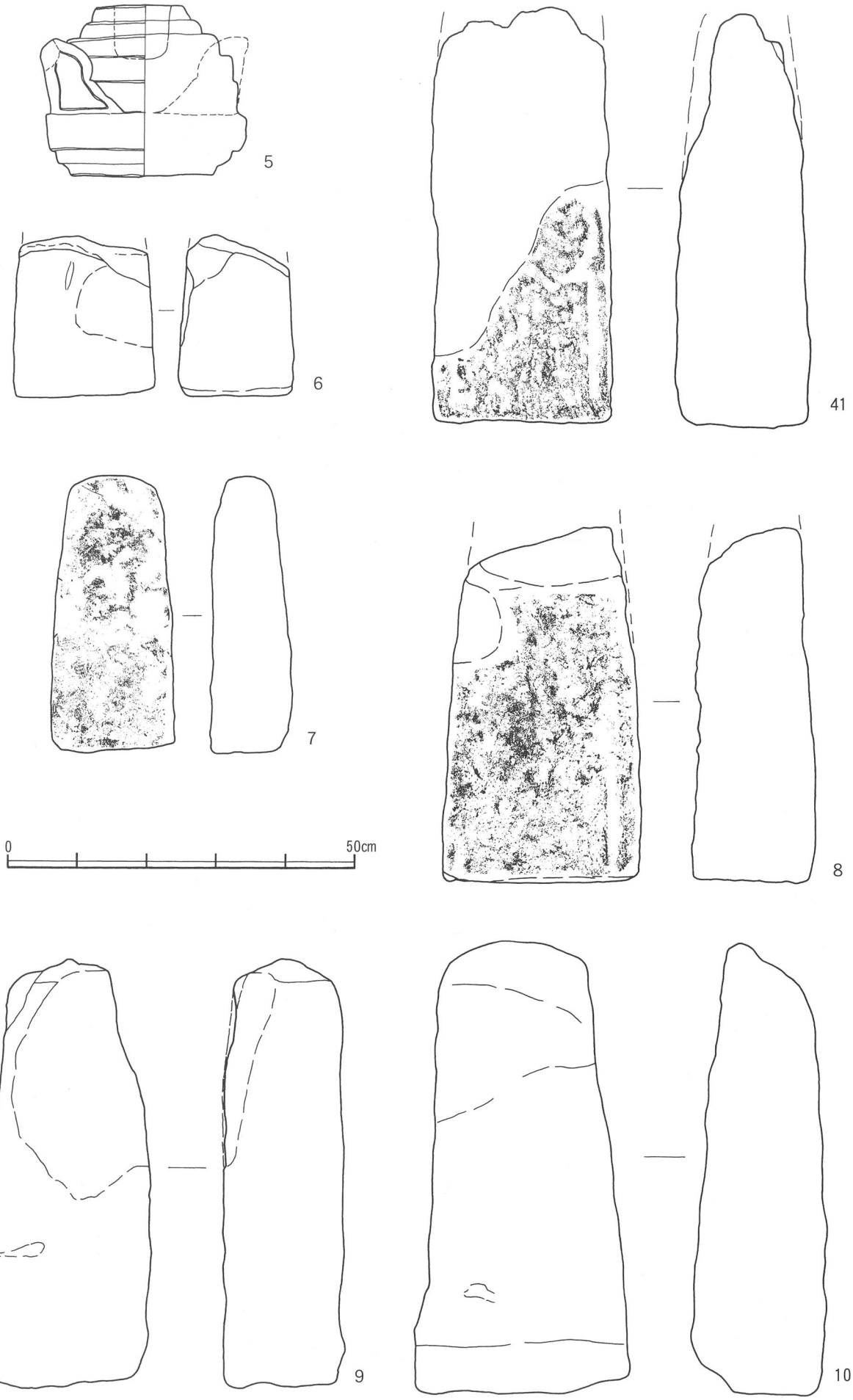
火葬骨は、Ａ３・Ａ４板石塔婆の基礎石の間、Ｂ４・Ｂ５板石塔婆の間、Ｃ２宝篋印塔の裏側の３箇所の集中地点から出土した。火葬骨の分析は後日改めて行う予定である。



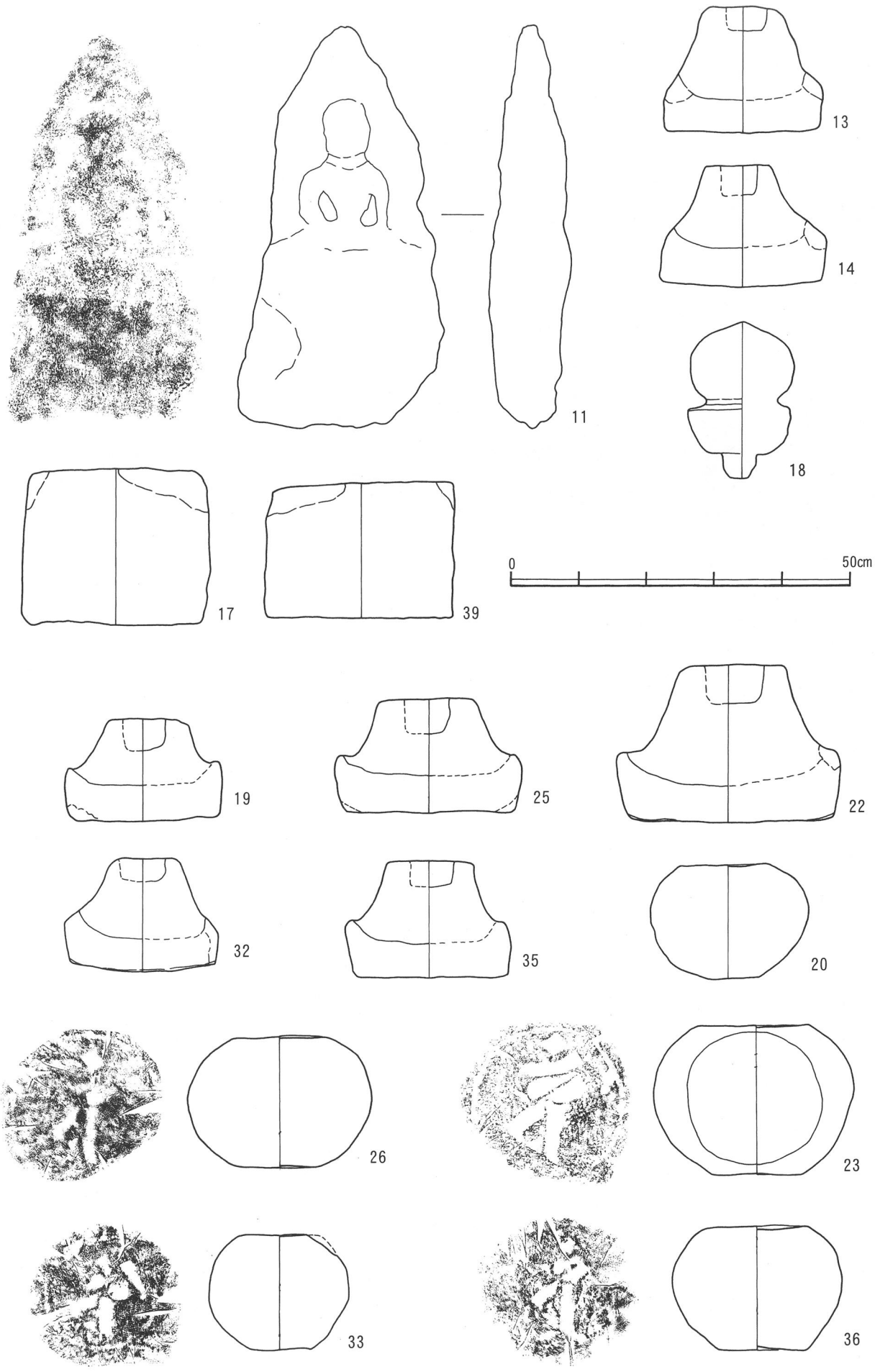
第８図　石造物実測図（１）



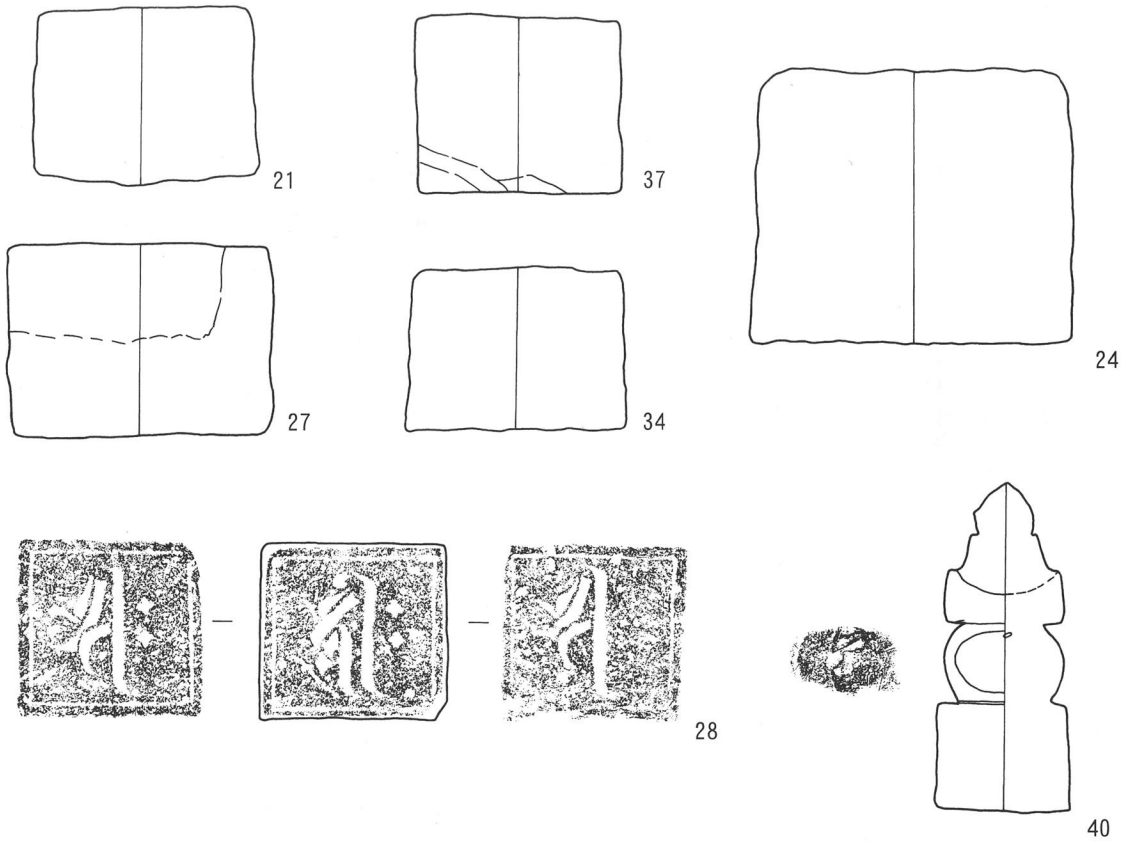
第９図　石造物実測図（２）



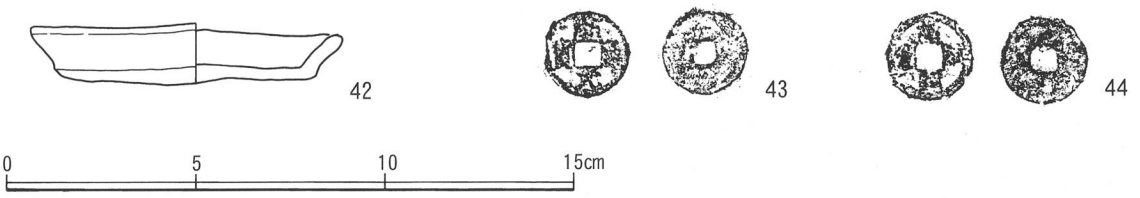
第10図　石造物実測図（３）



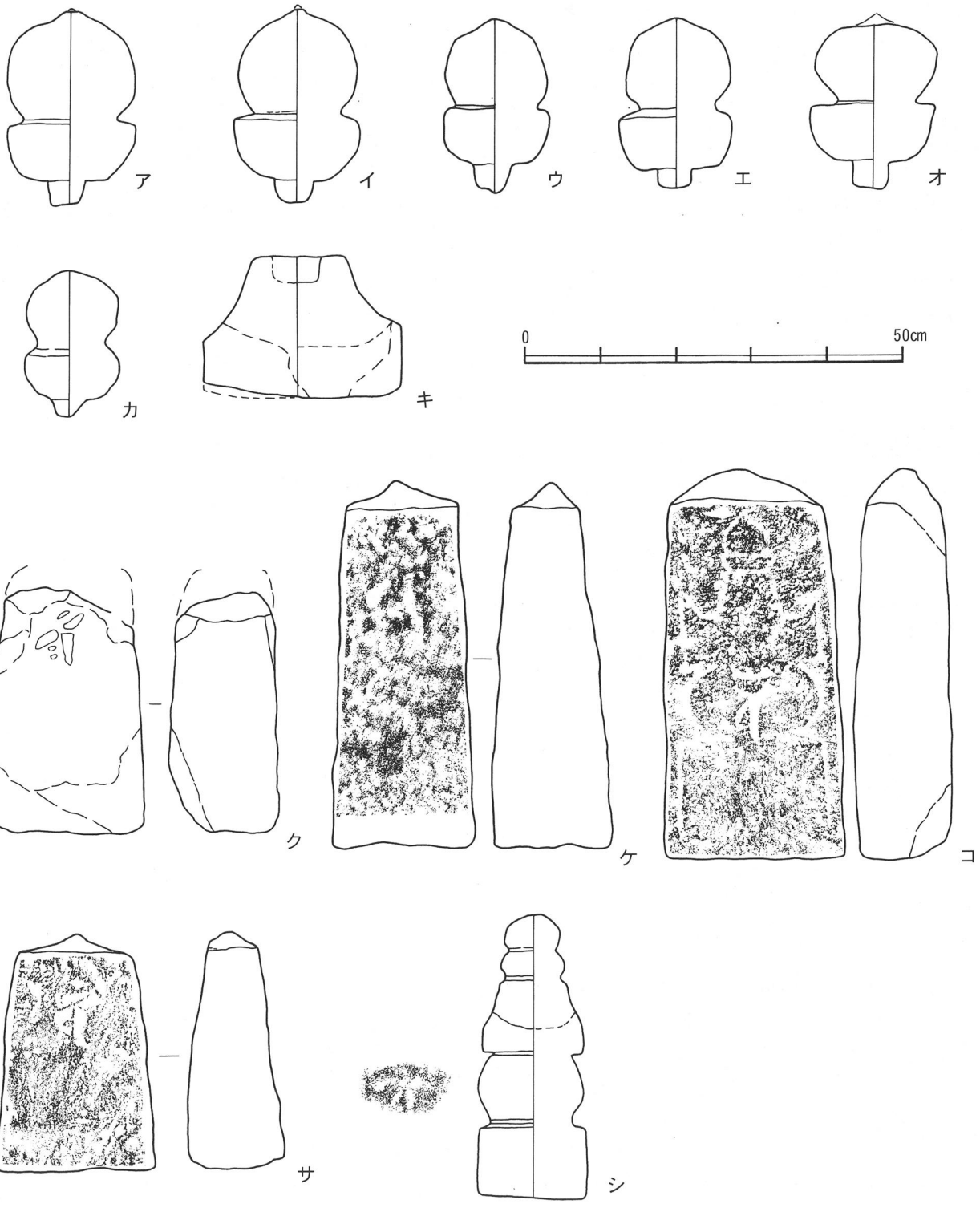
第11図　石造物実測図（4）



第12図　石造物実測図（５）



浅野氏宅庭内の石造物



第13図　石造物実測図（6）・遺物実測図

第4章　ま　と　め

調査の結果を基に、脇方谷内出中世墓の石造物造立の過程を、第14図のように推定してみた。

脇方谷内出中世墓の造営は、大きく４段階に分類できる。

第１段階は、Ａ区において本遺跡の造営が始まり、Ａ１～４板石塔婆が造立された時期である。

能登半島に板石塔婆の文化が伝播したのは鎌倉時代後期であり、口能登から奥能登内浦沿いに定着し、南北朝時代に盛期を迎えたという〔櫻井1983〕。

能登における初期の板石塔婆[1)]は、自然石の一面に大きく月輪・梵字・蓮座などを表現したタイプのものである。氷見市戸津宮千人塚の「キリーク」塔も、鎌倉時代にさかのぼる同様の資料とみられ〔京田・岡本1984、櫻井1989〕、氷見地域にも能登とほぼ軌を一にして板石塔婆が伝播したものと推測される。

こうした自然石タイプのものに対して、本遺跡のＡ１～４板石塔婆は、オベリスク状タイプのものであるが、調査以前にこれらを実見された京田良志氏と櫻井甚一氏は、鎌倉時代にさかのぼる資料と評価されている〔京田・岡本1984、櫻井1989〕。高さが１ｍ近い大型品であること、幅と奥行きがほぼ等しく断面が正方形になること、刻まれた梵字が雄渾であること、種子が弥陀三尊を示すことなどが、古い要素とみられる。ただ、初期のオベリスク状板石塔婆は近辺に類例が少なく比較検討が十分にできないこと、このタイプの板石塔婆の盛期が室町時代であることから、ここでは鎌倉時代末（13世紀末～14世紀初め）に位置づけておきたい。

第２段階は、Ｂ区とＣ区が新たに設けられ、前者に五輪塔が、後者に宝篋印塔が造立された時期である。これらの石造物には、五輪塔空風輪に欠首をもつものがある、火輪の下端が反りあがるものがある、水輪の最大幅が上半部におさまるものがある、宝篋印塔塔身に弥陀三尊の表現がある、などの要素があることから、南北朝時代（14世紀中頃～後半）に位置づけておく。

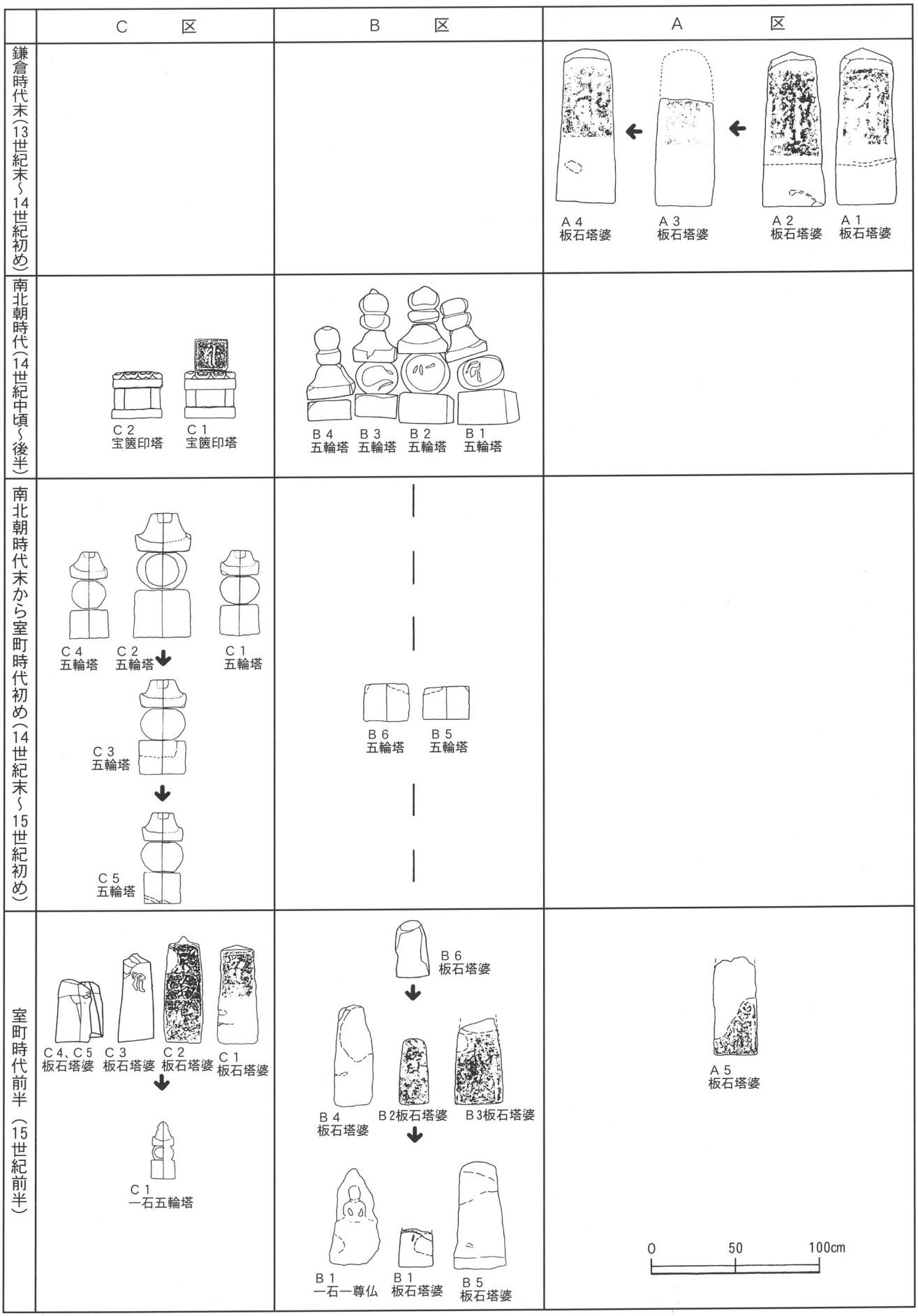
Ａ区に続き、この段階でＢ区・Ｃ区が造成されたと考えるが、それぞれ板石塔婆・五輪塔・宝篋印塔と、各区ごとに石塔が棲み分けされているのが特徴である。

第３段階は、Ｃ区に五輪塔が造立された時期である。Ｃ区の五輪塔はＢ区の五輪塔と比較して、空風輪の欠首がなくなる、火輪の軒下端が水平になる、水輪の最大幅がほぼ中央にくるといった要素がみられることから、南北朝時代末から室町時代初め（14世紀末～15世紀初め）に位置づけておく。

第４段階は、Ａ５板石塔婆、Ｂ区前列の板石塔婆・一石一尊仏、Ｃ区後列の板石塔婆と一石五輪塔が造立された時期である。石造物の形態や出土状況、Ｂ５板石塔婆の前から出土した土師器の年代から、室町時代前半（15世紀前半）の造営であろう。

なお、本遺跡は現状保存となったため、基礎石下部の発掘を行っていないが、岩盤を削って基壇を造り出していることから、基礎石下には遺構は存在せず、当初は供養塔として石造物が造立され、その後、墓地として利用されるようになったと推定している。なお、火葬骨は、出土状況から第４段階のものである。

以上の検討をまとめると、本遺跡は150年以上にわたって造営されたと考えられ、第１・第２段階においては、石造物の種類ごとに基壇を造り出し、Ｂ区では不明であるが、石造物は一つずつ基礎石にのせられ、供養塔として造立された。しかし第３段階になると、新たな基壇は造られず、また基礎石も徐々に省略され、以前の石造物を左右にずらして造立されるようになり、第４段階に至っては、それまでの



第14図　脇方谷内出中世墓変遷推定図

石造物の配列を乱して、その前後に墓塔として石造物が収められるようになった。従って本遺跡は14世紀末に変化が生じ、15世紀初めには墓所へと転換し、その後徐々に造営を終えたものと考えたい。これらの動きの背景には、何らかの信仰の変化がうかがえよう。

本遺跡の所在する丘陵の上には、現在菊理姫命を祀る今蔵神社があり、木造男神坐像１躯と木造随身像２躯１対が残されている。いずれも朽損・虫害が著しいが、前者は鎌倉時代、後二者は室町時代のものと推定されている〔櫻井1989〕。一方神社の周辺には、「道心寺」「高寺」「曼陀羅寺」「東満寺」「十三塚」などの地名がある〔清水1960〕。また、今蔵神社の東には、能登石動山古縁起と類似の寺伝をもつ浄土宗大栄寺がある〔橋本1984〕。これらのことから、本遺跡周辺には中世寺院が存在していた形跡がうかがえ、さらには地理的条件を含めて、石動山の影響が大きかった地域と考えられる。

以下、石動山との関わりの中で、本遺跡を考察してみる。

鎌倉時代の石動山は、五社（石動権現）すなわち石動寺として構成され（「仁和寺相助書状」実躬卿記巻裏文書・「拾芥抄」）、朝廷の祈願所になっていた（「宣陽門院所領目録」島田文書）。一方、本遺跡の所在する宇波川下流地区は、古代宇納郷にあたる地域であり、室町時代には宇波保として史料に登場するが、鎌倉時代の様子を伝える史料は見あたらない。ただ、石動山の分霊社の分布をみると、近畿・中部から東北の日本海側にまで広がっており、特に新潟県に多い〔清水1973〕。このことは、中世において石動山が越中側にも開けていたことを物語り、佐渡島にも分霊社があることから、石動山衆徒の動きには海運も大きな役割を担っていたと考えられる。とすれば、宇波川下流地域は、地理的条件からも石動山の一方の玄関口にあたると考えられ、鎌倉時代末にここにＡ１～４板石塔婆が造立されたことは、当時石動山の影響が海岸部にまで及んでいたことを示すものと考えたい。

ところで、Ａ１～４板石塔婆を含め、本遺跡の石造物のほとんどが、灘浦海岸産の微粒砂岩（やぶた石）製である。越中には鎌倉時代の年次在銘の板石塔婆として、大門町本江神明社の文永４年（1267）銘「キリーク」塔があり、また大島町中野大日寺の「キリーク」塔もこれと似た形をとる〔京田1994・2000〕。この２例も、氷見灘浦海岸産の微粒砂岩（やぶた石）を石材としており、板石塔婆の文化が伝わったのち、かなり早い段階から氷見灘浦海岸産の岩石が石材として利用されていたことがわかる。

この石材の分布範囲は氷見市阿尾から大境までの海岸部に限られ、またこの地域内にはやはり中世石造物の石材となった粗粒～中粒砂岩（小境石）の分布範囲も含まれる。実態は不明であるが、石材利用の背後には当然石工集団の存在も想定される[2)]。即断はできないが、こうした石造物製作についても、石動山衆徒の介在が推定できよう。

さて、鎌倉幕府滅亡後の建武２年（1335）に、越中守護普門（井上）俊清が建武新政から離反した足利尊氏に味方し、石動山に立てこもっていた越中国司中院定清を攻略した。この合戦で石動山は多くの堂舎が焼失したという（「太平記」巻十四）。そして暦応４年（1341）、石動山は光明天皇の宣旨により、足利将軍家によって勧修寺末として再興された（「能登国石動山五重塔婆供養并同寺講堂供養舞楽曼荼羅供日記」東寺観智院金剛蔵聖教　特十七）。

しかし、翌康永元年（1342）には、後醍醐天皇の皇子宗良親王が越中に滞在するなど（「李花集」）、射水平野を中心とした地域には、依然として南朝方の勢力があった。氷見市小境に造立された貞和３年（1347）銘「バク」塔は、髪塚と呼ばれ、現在宗良親王の伝承が結びつけられているが、北朝方の年号が刻まれていることから、逆に石動山との関係の中で理解した方がよいであろう。髪塚の詳しい性格は不明であるが、少なくともこの時期においても、石動山の影響が氷見灘浦海岸にまで及んでいたものと

考えられる。

観応元年（1350）に発した観応の擾乱では、反幕府勢力であった桃井氏の拠点が越中にあったため、桃井氏の没落する応安４年（1371）頃まで国内は動揺し、石動山やその山麓地域もたびたび戦闘に巻き込まれている。延文４年（1359）には、幕府に背いた井上暁悟（俊清）らを能登守護吉見氏頼が追討し、石動山下の白川・宇波などで戦闘があった（「得田章親代大隅貞章軍忠状案」得田文書）。さらに康安２年（1362）には、南朝方と結び石動山に拠った桃井直広を、能登守護吉見氏頼が攻撃し、降伏させている（「足利義詮御判御教書」吉見伝書など）。

このように、本遺跡第２段階の時期は、石動山やその山麓地域が大きく動揺した時期であり、この期間に本遺跡における動きが、基壇を増やし新たな石塔を導入するなど、活発になっているのが注目される。不安定な世情が、逆に宗教勢力の活動を強めたのではないだろうか。

さて、応永20年（1413）の史料によれば、白川・戸津宮は石動山領に、宇波は伊勢氏領になっている（「越中国棟別銭免除在所注文」東寺百合文書）。この史料にみえる伊勢氏領は、政所執事として伊勢氏が管領する幕府御料所（直轄領）と考えられる〔高森1986〕。寛正６年（1465）に、伊勢貞宗が聖護院杉坊の北国修験に際し宇波保などに宿所を斡旋し（「親元日記」一）、文明末年には、宇波保などが室町幕府御料所として書き上げられていることから（「室町幕府諸国料所方支証目録」『福井県史』資料編二）、宇波保は少なくとも15世紀末近くまで幕府直轄領であった。

室町幕府御料所の推移を元に、その構成や展開について整理された田中淳子氏の研究によれば、御料所は、政所執事伊勢氏のもとで管理され、使途も定められて長期間継続したものと、闕所地の発生などに従って、随時設定・解除されるものとの、二つによって構成されていたという〔田中1997〕。宇波保をこれに当てはめるとすれば前者に相当し、室町幕府中期の経済基盤を支えた御料所のひとつといえるようである。

宇波保を御料所として成立させた時期・事情は明らかではないが、暦応４年（1341）以降幕府がその復興に手を貸した石動山が、康安２年（1362）に一転して南朝方の拠点になったことが注目される。桃井氏を中心とする反幕府勢力が一掃され、越中国内を再編する過程で、幕府は白川・戸津宮地区を石動山領として認める一方で、海岸に面した宇波地区を直轄領とし、石動山を牽制しようとしたのではないだろうか。前述したように、宇波保の場所は、石動山の入口にあたる交通の要衝であり、幕府はその出入りを監視するとともに、関銭徴収などを行っていたのであろう。上記「親元日記」の史料も、そうした状況を裏付けるものと考えたい。

もう一つ注目すべき点は、宇波保が石造物石材の微粒砂岩が分布する範囲に含まれることである。氷見地域を中心に分布する微粒砂岩製石造物の盛期は15世紀とみられ、これは宇波保が幕府直轄領であった時期にほぼ一致する。こうした石材や石工集団といった特別な資源・技術に対しても、何らかの役銭が課せられていたのではないだろうか。

14世紀末に変化が起こり、15世紀初めに墓所へと転換し、徐々に営みを終える本遺跡に立ち帰れば、こうした動きの背景には、幕府御料所となり、石動山からの直接の影響が薄まったことがあるかもしれない。

ただ、近年の発掘調査の成果によれば、越中では15世紀後半に街道沿いに集村し、特に拠点的地点では深い堀を配置する〔宮田1997ｂ〕。宇波保に南接する八代保（庄）でも、15世紀後半にそれまでの集落を再編して、大溝によって区画された阿尾城下が形成されており〔氷見市博1999〕、おそらくそれに

伴って石動山登拝道も、それまでの宇波・脇方→白川→戸津宮のルートに代わって、阿尾→北八代→藪田見田窪→白川→戸津宮のルートが主となったと思われる。本遺跡の動向は、集落の再編・街道の整備など、15世紀後半の社会の変化の中でとらえるべきであろう。

以上、調査を総括して、本遺跡は次の点で貴重な事例といえる。

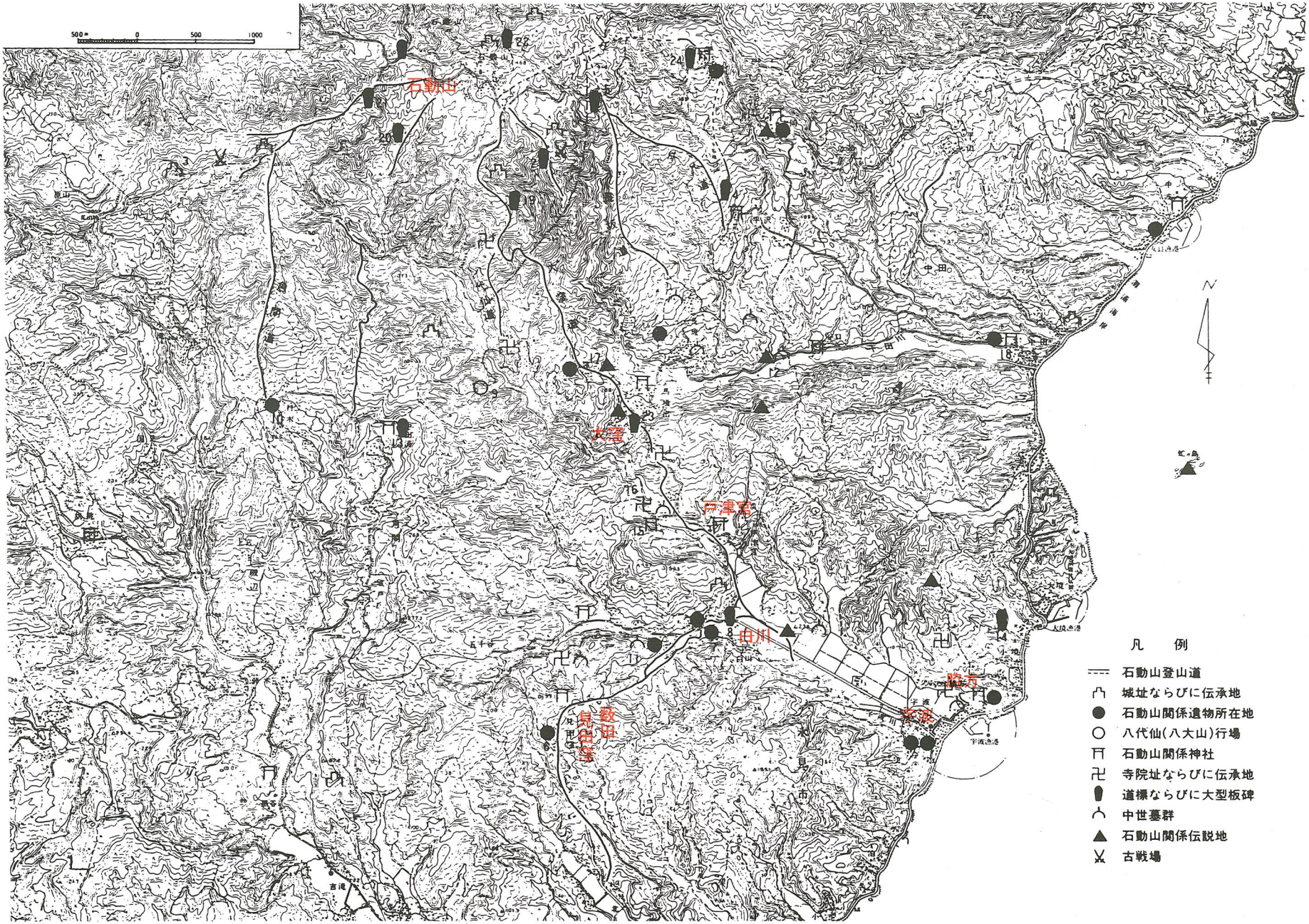
第1に、造営課程の状態、すなわち信仰の形態が、よく保たれていること。第2に、鎌倉時代にさかのぼる石造物があり、かつ弥陀信仰の表現が珍しいこと。第3に、4段階の造営課程がほぼ明らかであり、その間の変化変遷がうかがえること。第4に、年代の幅がある程度あり、石造物も多種多様であること。第5に、石造物のほとんどが在地の石材を使用していること。

氷見地域には、数多くの石造物が分布しているが、それらのほとんどは原位置を保っておらず、本来の姿をうかがうことができない。そのような状況の中で本遺跡例は、中世墓・中世石造物の研究を進める上で貴重な事例といえる。幸いにも、地元をはじめとした関係者各位のご理解とご協力を得て、現状保存されることになった。今後は、石造物の保護を含め、いかに活用をはかるべきか、課題を残したといえよう。

注

1　京田良志氏が「板石塔婆」「オベリスク状」「月輪」の用語を使用されるのに対し、櫻井甚一氏は「板碑」「方錐型」「円相」の用語を使用されている。本稿では煩雑さを避けるため、京田氏の用語に統一した。

2　脇方地区には「丁場」姓の家が数軒ある。石工の間では、石切場のことを「丁場」と呼ぶようであるが〔田淵1975〕、脇方地区において石切場や石工に関する伝承は、今のところ拾えない。



第15図　石動山関係図（〔氷見市立博物館1985〕所収図に加筆）

参 考 文 献

清水一布　1960　『灘浦誌』

清水宣英　1973　「石動山の歴史」『能登石動山』北国新聞社

田淵実夫　1975　『石垣』ものと人間の文化史15　法政大学出版局

京田良志　1976　『富山の石造美術』　巧玄出版

橋本芳雄　1977　「石動山縁起と五社権現」『白山・立山と北陸修験道』山岳宗教史研究叢書10　名著出版

櫻井甚一　1983　「石川県」『板碑の総合研究』２地域編　柏書房　（北国新聞社　1990『能登　加賀の中世文化』石川縣銘文集成研究編　所収）

京田良志・岡本恭一　1984　「石造物関連遺跡」『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』氷見市教育委員会

橋本芳雄　1984　「石動山信仰と越中との関係」『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』氷見市教育委員会

氷見市教育委員会　1985　『富山県氷見市藪田薬師中世墓発掘調査報告書』

氷見市立博物館　1985　『氷見の石造美術』

鹿島町　1986　『鹿島町史』石動山資料編

高森邦男　1986　「畠山氏の領国越中と棟別銭収取について」『富山史壇』第91号

櫻井甚一　1989　「造形資料」『国指定史跡石動山文化財調査報告書』　石動山文化財調査団・氷見市教育委員会

氷見市教育委員会　1989　『脇方横穴群』氷見市埋蔵文化財調査報告第10冊

西井龍儀他　1992　「考古資料」『井口村史』下巻（史料編）

東四柳史明　1992　『半島国の中世史』北国新聞社

京田良志　1994　「熊野往来」『大門町歴史の道調査報告書』　大門町教育委員会

三浦純夫・垣内光次郎　1994　「能登の鎌倉時代板碑を読む」『加能史料会報』第７号（石川史書刊行会　1999　『加賀・能登　歴史の窓』所収）

田中淳子　1997　「室町幕府御料所の構造とその展開」『日本国家の史的特質　古代・中世』思文閣出版

宮田進一　1997ａ　「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸』桂書房

宮田進一　1997ｂ　「越中国における中世集落の様相」『中・近世の北陸』桂書房

氷見市　1998　『氷見市史』３　資料編１　古代・中世・近世１

氷見市　1999　『氷見市史』９　資料編７　自然環境

氷見市立博物館　1999　『特別展　戦国・氷見』

京田良志　2000　「蓮弁周縁月輪の起源について」『富山市日本海文化研究所報』第24号

図　　版

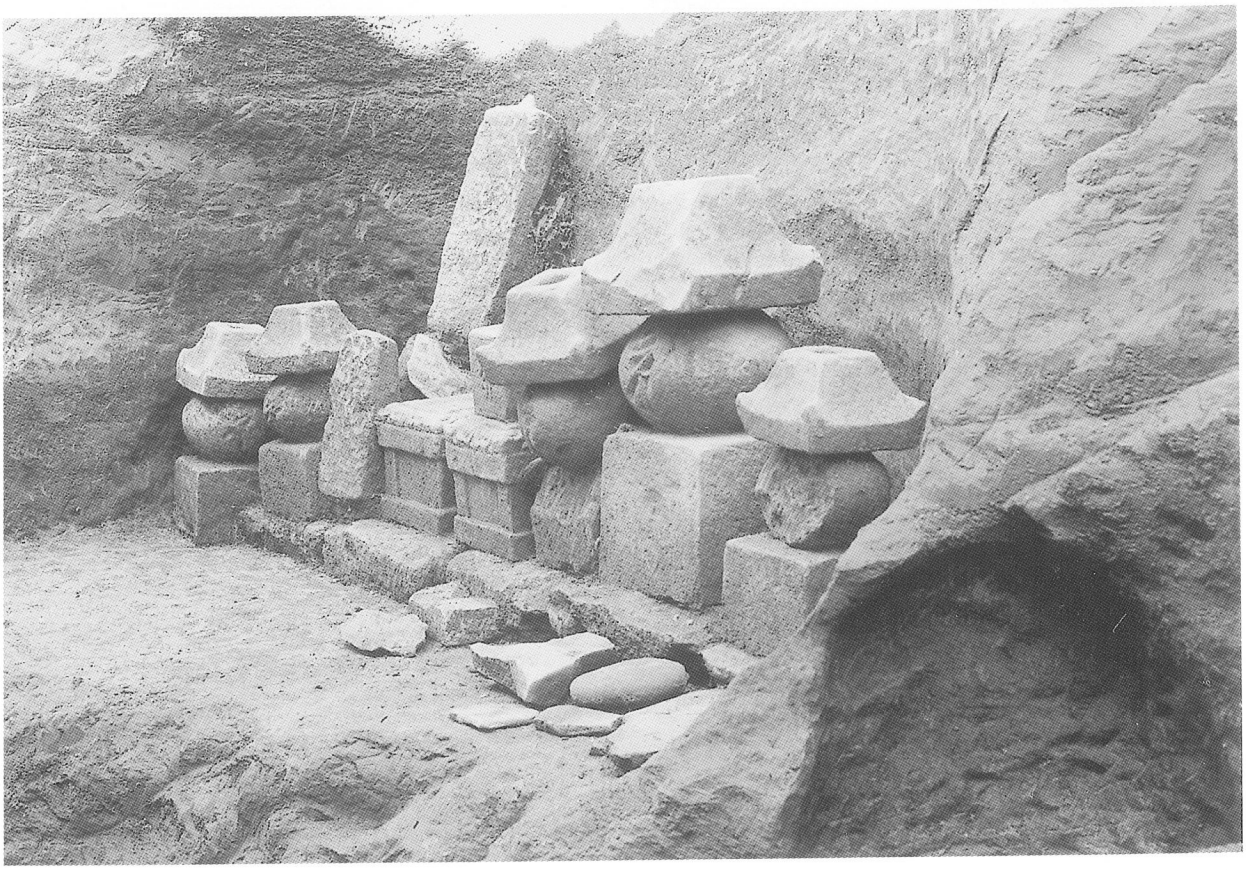
(1)　遺跡周辺空中写真（西から）

(2)　遺跡全景（東から）

(1)　調査前の様子（A区・南から）

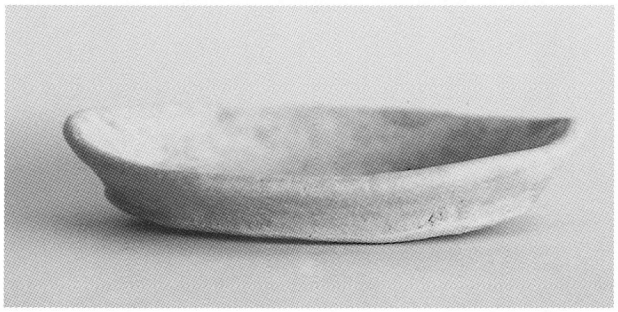
(2)　調査後の様子（A区・東から）

(1)　調査後の様子（B区・西から）

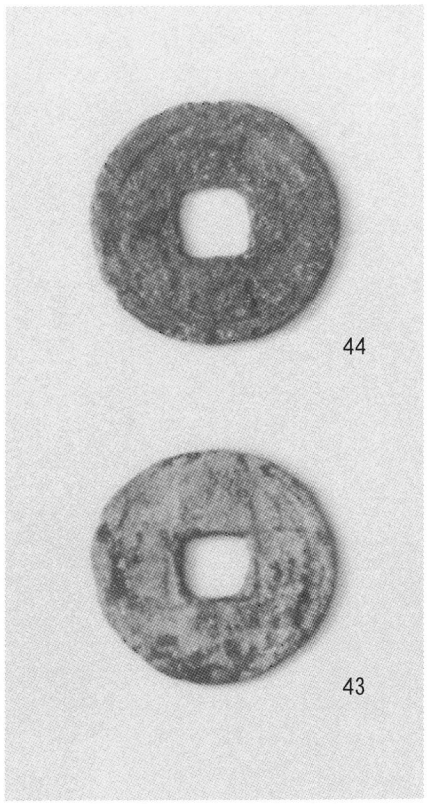


(2)　調査後の様子（C区・東から）

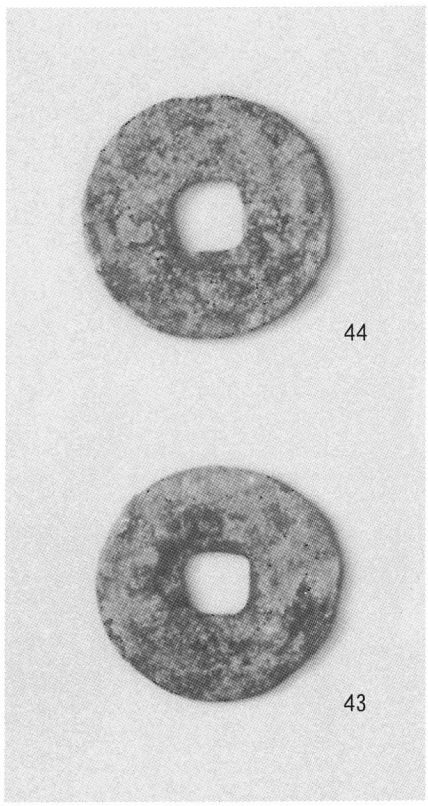
図版4



(1)　土師器小皿



表面



裏面

(2)　銅　　銭

報告書抄録

ふりがな	わきがたやちでちゅうせいぼ
書名	脇方谷内出中世墓
副書名	
巻次	
シリーズ号	氷見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第３１号
編著者名	大野　究
編集機関	氷見市教育委員会
所在地	〒935-0016　富山県氷見市本町４番９号　ＴＥＬ0766(74)8215
発行年月日	西暦2000年５月25日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わきがたやちでちゅうせいぼ 脇方谷内出中世墓	とやまけんひみし わきがた 富山県氷見市脇方	16205	261	36° 54′ 45″	137° 01′ 20″	19990913 ～ 20000331	20	急傾斜地崩壊対策工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
脇方谷内出中世墓	中世墓	中世	基壇	板石塔婆 五輪塔 宝篋印塔など	原位置を保つ石造物が多数確認され現状保存とした。

平成12年５月20日　印刷
平成12年５月25日　発行

脇方谷内出中世墓

氷見市埋蔵文化財調査報告書第31冊

編集・発行　氷見市教育委員会
〒935-0016
富山県氷見市本町４番９号
☎0766(74)8215
印　　刷　有限会社 ひふみ印刷社